

「食」を通じて菩薩行

佛立宗の信心を心の支えに震災後も繁盛続ける

兵庫県伊丹市のレストラン 「アンシャンテ」

兵庫県南部地震の激震地からやや離れた兵庫県伊丹市野間字東向に小綺麗なイタリア料理レストラン「アンシャンテ」がある。阪急電車「武庫之荘」駅から車で五分。震災から一周忌の一月十七日から延べ五日間、店内をバイキング形式の“ビュッフェ”として開放、売り上げの一部を震災義援金に充てるという企画を立てた。連日、満員の大盛況。“ビュッフェ”最終日の二十四日、経営者の宇津木由夫さん（株式会社「ダイユウ」代表取締役）と義兄の大場米太郎さん夫妻に、忙しい時間の合間を縫ってインタビューに応じてもらった。宇津木さんの信条は「食を通じて人の役に立ちたい」。震災後もお客さんは増える一方で、経営する二つの店を合わせると平成七年度の客数は六万人を突破、売上高は三億円を超す勢いにある。本門佛立宗の信心を糧に身内で力を合わせ、近隣の人々に幸せの種を蒔く。その不思議な繁昌物語である。

平成七年一月十七日午前五時四十六分。激しい揺れが兵庫県を襲った。「頭が真っ白になりました」と由夫さんはその時のことを回想する。幸い鉄筋三階建てビルの一階にあるレストランはブランデーの瓶が割れた程度で建物は無傷だった。大きな被害を受けた従業員もいなかった。

この日、店の冷蔵庫の中の食べ物をさらうようにしておにぎりやパン、お菓子など一千食分を自動車に満載して、従業員と一緒に被災の中心地へと走った。芦屋、西宮など四カ所の避難所へ食べ物を届けた。

武庫川を境目に、川向こうが甚大な被害を受けていた。川の手前でも、店から道路を隔てた一帯で水道などが止まるなど混乱したが、「アンシャンテ」は電気、ガス、水道すべて大丈夫だった。翌日から店の前にテントを張った。炊き出しのスパゲティやおでんをつくり、川向こうの西宮、宝塚方面から来た被災者に無料で食べてもらった。川から手前側の人には有料とした。ごまかす人など一人もいなかった。車道に溢れる賑わいぶりは、まるで文化祭だった。

交通網が不通になり、仕入れ業者も来てくれない。そこで毎晩、「救援物資調達」の張り紙を張った車で大阪まで仕入れに走った。有り難いことに、パン、ミネラルウォーターなどの食料をただ同然でくれる業者がたくさんいた。庶民の善意は健在だった。

◇

「アンシャンテ」がテナントとして入っているビルの二階に大場税理士事務所がある。税理士の大場米太郎さん夫妻と子息らが、ここでコンピューターを使って税理士の業務を行なっている。「アンシャンテ」の宇津木由夫社長は、米太郎さんの妻・光代さんの弟である。ビルの三階は大場夫妻の自宅になっている。自宅に本門佛立宗の立派な御宝前（仏壇）がある。この御宝前が由夫さんの精神的支柱となっている。

「弟はアイデアが凄いんです。全部当たるんです」と、光代夫人は目を細める。お客さんを引きつける魅力があるという。由夫さん「私は幸いにして五体満足に元気になっていただいています。だから食べ物を通じて〈お客さんのお役に立つ〉。これを使命と感じています」。店が忙しくてお寺にあまり参れないが、由夫さんを見守ってくれているような気がする御宝前を心の支柱としてきた。

近隣の人々に幸せの種蒔く

大場米太郎氏が脱サラを志して税理士資格を取るための勉強を始めたのは二十九歳の時である。二年後、四十倍

近い競争率を突破して見事に税理士資格を取得。その翌年の昭和四十二年から税理士の仕事を開業した。以後、光代夫人と夫唱婦隨の猛烈生活が始まる。

二人は本門佛立宗の信心深い家庭に育ち、結婚した。光代夫人は大阪市北区にある同宗の清風寺（西村淳農住職）に毎朝六時半から始まるお看經に殆ど毎日出ている。昨秋、清風寺の事務局長に就任した米太郎さんも一年のうち三百日以上、お看經に参拝している。夫妻は熱心な佛立信者だ。

ご主人の大場米太郎さんは語る。「ご信心をしているせいか、人の気持ちが分かるんです。資金繰りなどで困っている人を見ると人ごとと思えず、夜を徹して必要な書類を作ってあげて届けるということが再三でした」。自転車、電車、徒歩で奔走、お客さんから「猛烈先生」の異名をとった時期もある。「二時間が三時間寝たらシャンとしました」

異体同心の光代夫人は「気がついたら朝ということがよくありました。そのままお寺へ行ったこともあります。一生懸命でしたから、苦しいとか辛いとかは思いませんでした」と当時を懐かしむ。

株式会社「ダイユウ」の一号店は、武庫之荘駅南側のフランス料理レストラン「ぼるどー亭」である。光代さんのすぐ下の弟の宇津木正実さんが取り仕切り、繁昌している。「ぼるどー亭」がテナントに入っている家主さんが米太郎さんに税務相談に来たのが発端だった。

当時、駅南手は午後九時半になると駅のシャッターが降りた。周囲は田圃だった。田舎とフランス料理店。当時は、自殺行為と言われたが、「これから周囲も発展してよくなるから頑張ろう」と、反対を押し切り、光代さんを社長に、昭和五十一年十二月四日にオープンした。これが図に当たった。

昭和五十八年。大場夫妻の長年の夢だった自前の事務所ビルが野間に建つ。イタリア料理「アンシャンテ」が、「ダイユウ」の二号店として事務所ビルの一階に開店した日は、偶然「ぼるどー亭」オープンからちょうど七年目の十二月四日だった。

開店当時、ここも一面畑だった。コープがボツンと近くにできていた。だから将来性のある土地だと考えた。事前の市場調査のため、昼間に道行く車の数を調べた。一時間に五～六台。カウンターを使う必要もなく、指で数えたものだ。しかし、ここも今では全く見違えるような発展ぶり。新設された道路には路線バスがひっきりなしに走り、終日車が絶えない。

人を喜ばせ、幸せになってもらえるようにという“菩薩精神”が、大場夫妻と宇津木兄弟の信条である。そんな心遣いが自ずからお客さんに伝わる。由夫さんは「食べ物を通じて人の役にたたい」という話を、従業員にもしている。

店は午前十時に開店するが、店の入り口に並ぶケーキとパン作りのため、午前六時頃から店内に明かりがついている。従業員が自主的に早朝から出てきているのだ。毎日、その日のうちに商品を売り切る。良心的経営は従業員（三十一人）の定職率にも反映し、十年選手が何人もいる。

◇

昨年の震災から一カ月後、摂津本山の第二小学校へ、清風寺のボランティアとして光代夫人も参加した。「アンシャンテ」で作ったチーズケーキ百台をプレゼントし、インスタントコーヒーを立ててあげた。「ここでケーキなんか食べられるとは思わなかった」と被災者が喜んでくれた。

店の近くの野間に震災被災者の仮設住宅がある。昨年のサンタクロースの日に、ぜんざいとイタリア料理のご飯のリゾットと蜜柑を二百人分届けてあげて喜ばれた。

光代夫人は「二十九年間、主人の仕事を手伝わせてもらい、社長業も体験させてもらったお陰でいろんなことが広く見られるようになり、勉強になりました。ゼロからの出発でここまで来られたのはご信心のお陰やと思います。主人が六十五歳になる四年後からは仕事の量もセーブしてもらって、二人で鄙びた温泉にでも行きたいと楽しみにしています」と話していた。

佛立信心で異体同心の大場米太郎・光代夫妻(左)と「ダイユウ」の宇津木由夫社長【写真は省略】